

伊奈波神社の春祭り

寛 真理子
(岐阜市歴史博物館学芸員)

毎年四月に行われる岐阜祭りには、伊奈波神社に山車がひき出され、造り神輿や露店でにぎわいます。かつては、この春の例祭はどのような姿だったのでしょうか。ここでは古文書や絵画などから明治以前のありさまを考えてみたいと思います。

伊奈波神社の祭礼についてしるした一番古い史料は、室町時代のものです。延文四年(一三五九)の年紀のある本縁起には、三月三日から六日まで八講を勤め、近隣の地域から頭人が出て奉幣するとしるされています。また、万里集九という選俗僧が残した詩文集『梅花無尽蔵』には「濃州第三宮、因幡大菩薩の祭礼再興の題辞」という文があります。そこには、伊奈波神社の祭礼が近年衰えてきたのを神様が夢のお告げで嘆かれたので、昔どおり盛んにすると述べられています。日付は明応五年(一四九六)三月三日で、祭礼当日

だったと考えられます。しかし、この頃の祭りの具体的なようすはつきりしません。

江戸時代に入ると、一八世紀中頃に書かれた『岐阜志略』に「昔は毎年三月一日から六日まで勤めていたが、一六世紀末から衰微し、慶長年中(一五九六〜一六一五)に岐阜町全体から二四輛の山車が渡るようになった。のちまた縮小されて、今は三月三日に社頭に二輛を飾る」と書かれ、江戸時代初めに二四輛御した山車が、この頃には二輛を飾るだけとなっていたことが判ります。同じころ釜石町(現在の岐阜市本町三丁目)に住む有力商人の柴田与市は日記に祭りのようすを記録しました。享保一〇年(一七二五)三月三日の条で、「天気よく、祭礼が首尾よく渡った。上大桑・東材木町の両町で、上大桑町は白髭(しらひげ)、東材木町は邯鄲(かんたん)である。白髭のカラクリは丁寧で、邯

鄲は前代未聞のカラクリ、結構至極であった。少し失敗があったが、素晴らしさに誰も気にしなかった。毎年の祭りであるが、いつもと変わったことなので記録しておく」と、カラクリの出来映えに感心しています。二輛のカラクリ山車は、『岐阜志略』の記述と一致します。さらに一九世紀前半に成立した『美濃雜事紀』には「例祭は三月四日で狂言が行われたが、岐阜奉行のお考えて文政一〇年(一八二七)から狂言をやめて山車になった」と書かれますが、先述のように山車は文政一〇年が初めてではありません。あるいは狂言を止めて山車だけにしたという意味でしょうか。

このころに祭礼を見物した本居大平(宣長の養子。一七五六〜一八三三)の長歌が、伊奈波神社に伝えられています(図一)。「三月三日御祭を見奉りて」という題で、「春風の伊奈

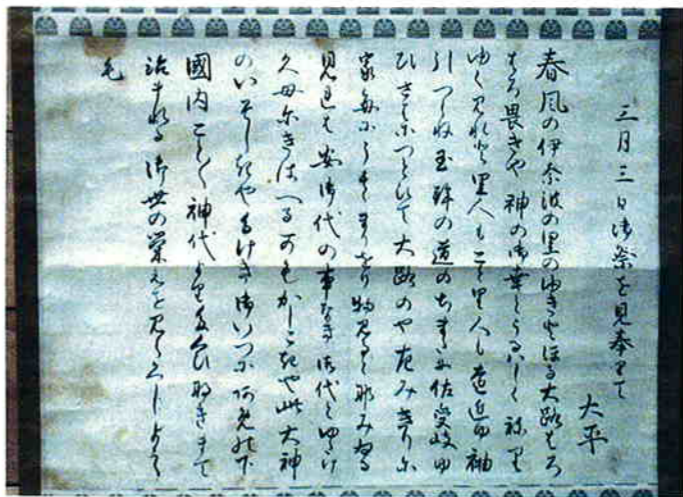


図1

波の里の ゆきとおる 大路は
ろばろ 畏きや 神の御幸と
うるわしく ねりゆく見れど
里人も こと里人も 遠近ゆ
袖引きつらね」と、遠近の人が
道に垣をなして見物して泰平の
御代を喜び、伊奈波神社の神威
を尊ぶさまを詠んでいます。

ですが、私の知る限りでは江戸時代の史料はほぼこれ全部です。柴田与市も書いているように毎年行われることは記録されにくいので、時代の移り変わりによる有力者の交替、濃尾震災などで神社や岐阜町住民の書いた記録類が失われているためです。しかし、江戸時代後半には町ごとの山車が次第にそろっていききました。幕末の祭礼がいかに華やかだったかは、二枚の絵からうかがうことができます。一枚は尾張藩士の小田切春江が描いたもので、写真が『伊奈波神社略誌』に掲載されています。そこには、三月三日に各町から出された山車が神社前の坂を登るのを見物する群集が描かれ、山車にはカラクリ山車と十歳以下の踊り子が乗る踊り山車の二種があり、彫刻や幕の美々しさは目を見張るほどだと解説してあります。もう一枚は「岐阜因幡御神事」と題する木版印刷物(岐阜市歴史博物館所蔵。図2)で、家並みの間を進む二七輛の山車をみつしりと描きます。踊り山車とカラクリ山車、鷹狩りの仮装行列、神輿、神という内容で、米屋町な

ど岐阜町(ほぼ現在の岐阜市金華校区に当たります)の各町が構成メンバーです。ただし、柴田与市の日記と違い、東材木町は踊り山車、上大久和町は胡蝶のカラクリになつており、享保十年以降に変更があったようです。幕末には、岐阜町の多くの町が山車を持ち、そろって祭礼に引き出したのです。

このにぎわいは明治になつても引き継がれました。明治五年(一八七二)の祭礼は『伊奈波神社略誌』に載せる岐阜県庁への届けによると幕末とほとんど同じですが、小熊町・中鉄屋町(いずれも小熊村の一部)も山車を出しています。この翌年、太陽暦の採用によつて祭礼は三月から四月へと変更されました。また、明治時代前半には当番制で山車を出すことが定められたようです。この頃のカラクリ人形は、前号で紹介した牧田種麿による絵巻や板絵に描かれています。

しかし、これらの山車の多くは明治二四年(一八九一)の濃尾震災で失われました。博物館で預かりしている伊奈波神社の古文書の中には、明治二三年以降の祭

礼記録の一部が残されています。明治二三年にはカラクリ山車八輛、踊り山車三輛、三カ町の作り物、神輿二基が練り出されました。翌二四年はカラクリ山車六輛、踊り山車三輛(踊りの演目は鏡山・御所桜三段目・七福神)、二カ町の作り物、神輿三基でした。しかし震災後の明治二七年は、カラクリ山車が米屋町・車之町(現在の本町五丁目)だけで、踊り山車は無しとなつています。震災前の賑やかさと比べると、実にさびしくなつてしまいました。

竹や紙で作った張り子を飾る造り神輿だつたと思われれます。また、祭礼に加わる地域も旧岐阜町から拡大していききました。現在の祭礼では、清影車・安宅車・蛭子車・踊り車が奉曳されます。これらは、震災後に新造・改修されたものです。三〇輛近くの山車が連なつた時代には及びませんが四輛の山車は、ここに述べたような歴史を背負つて曳き出されているのです。

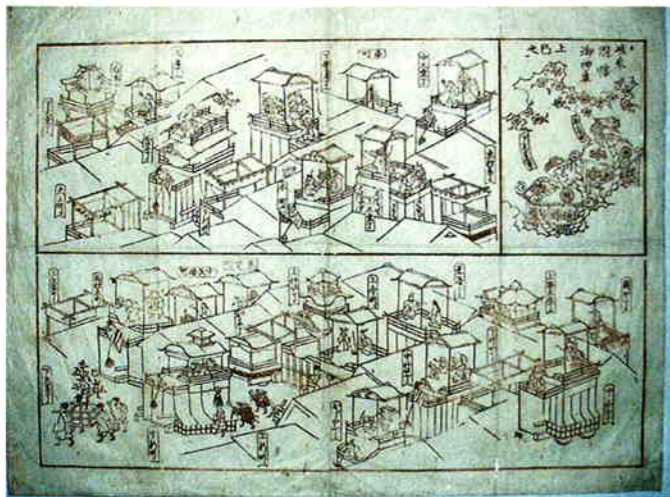


図2